

九州大学附属図書館蔵『紫明抄抜書』について

田坂, 憲二
福岡女子大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/9409>

出版情報 : 語文研究. 82, pp.1-12, 1996-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



九州大学附属図書館蔵『紫明抄拔書』について

田 坂 憲 二

一

九州大学附属中央図書館に、素叔の『紫明抄』の抄出本が蔵されている。『紫明抄』は、鎌倉時代を代表する源氏物語の注釈書でありながら、その伝本は十本程度——しかも、そのほとんどは残欠本か残存本——しか報告されていないため、新たな伝本の究明は重要な意味を持つ。当該本は、墨付一六丁の小冊子ではあるものの、その書写年代は室町時代末期頃かと推測され、『紫明抄』諸本のなかでは、比較的古いものに属する。^(注1)更に、その本文系統を検討すると、現存の諸伝本の欠落を補うことのできる重要な文献ではないかと推測される。にも拘らず、当該資料は従来正面から取り上げて論じられたことがないようであるので、ここに改めて考察を加える所以である。

猶、以下本稿では、当該資料を九大本と略称する。

二

まず、九大本の書誌について簡略に記しておく。

原本は、縦一九・五糎×横一五・四糎の楮紙、袋綴。現在は改装（原本に合紙を入れて補修をし、天地共に約二糎ほど大きくし、同寸法の表紙を付す）。墨付第二丁オの「寺尾寿蔵書」印が、原本と合紙にまたがって捺されていることから、改装は首無文庫主寺尾寿氏、もしくはそれ以前の段階でなされたことがわかる。外題は、本表紙左肩に「源氏物語注紫明抄拔書」と墨書。外題下方に「白」と記す。内題は「□氏物語注紫明抄拔書 桐壺」とある。墨付一六丁。一面行数八〜二行。冊子の後半に進むほど文字は小ぶりとなり、行数も増加する。二丁オから九丁ウにかけて、上部のどの部分に破損があり、第二丁オは特にはなほだしく、内題及び次二行の上部約三分の一ぐらいが失われている。全体に亘って若干の虫損があるが、八丁以降が特に著しい。

内容は、『紫明抄』のうち、桐壺巻く末摘花巻の一部分を抄出し

たもの。注釈項目数は、全三八項目。帖末に「すゑつむ花までの内所々うつしと、む也／応永廿五卯月廿五日」と記す。実際の書写年代は応永二五年（一四一八）よりも更に下り、室町末期頃か。朱の合点・句点・声点等がある。又、若干の異文校合がある。蔵書印は「加持井御文庫」「寺尾寿蔵書」「音無文庫」、他に九州大学の蔵書印、受人印。九州大学附属図書館音無文庫本。函架番号、五四五ケ二。図書館備え付けのカード目録によれば、昭和四年に北澤彌三郎を介して九州大学に入っている。

猶、九大本は、外題下方に「白」と記されていることから、近衛種家男、前久（前嗣）弟にして、聖護院門跡の道澄（白は道澄の連歌名）の旧蔵書であることが分かる。聖護院道澄は、青表紙本系大島本夢浮橋巻の書写者でもあるから、本資料は、源氏物語享受史の上でも、貴重なものであるといえよう。九大本同様に、外題（打ち付け書、又は題簽）下方に「白」と記している資料には、天理図書館蔵『源氏物語系図』一帖（九一三、三六一一―一五九）、同館蔵『源氏物語語尋木巻』一冊（九一三、三六一一―一六九）、同館蔵『源氏注』一冊（九一三、三六一一―一六五）等があり、なかでも初めの二資料は、梶井宮旧蔵本であることも九大本と共通し、伝来過程を同じくするものとして興味深いものである。又、九大音無文庫（寺尾寿氏旧蔵書）には、同じく梶井宮旧蔵の『伊勢物語集注』（五四五―一〇）十冊、などが含まれている。

三

まず、九大本がどのような内容であるのか、通行の『紫明抄』か

らどのような項目を抜き出しているのか、質的・量的に把握できるように、一覽表にしてみよう。

①	桐壺 50	大液芙蓉未央柳	享受史上の逸話	（本文ノミ）	51行
②	帚木 110	胸こがるる夕べ	典拠		21行
③	〃 128	さるべき節会	典拠		18行
④	〃 129	九月九日の宴	典拠		8行
⑤	〃 135	中河のわたり	地名考察		6行
⑥	〃 136	しぞきて	漢字語釈	}	
⑦	〃 137	なめげなる	漢字語釈		2行
⑧	〃 138	きよろしき	漢字語釈		
⑨	〃 139	おまし所	漢字語釈		
⑩	〃 175	伏屋におふる帚木	典拠		12行
⑪	空蟬 10	伊予の湯桁	典拠		10行
⑫	夕顔 19	はらから	語釈		6行
⑬	〃 21	よりにこそそれかともみめ	（本文異同）（引用本文ノミ）		6行
⑭	〃 31	昔ありけん物の変化	典拠	（本文ノミ）	19行
⑮	〃 40	長生殿の古きためし	典拠	（本文ノミ）	4行
⑯	〃 41	いざよふ月	引歌・語釈		4行
⑰	〃 42	某の院	典拠		14行
⑱	〃 43	けいめいして	語釈		½行
⑲	〃 45	息長川	引歌		3行
⑳	〃 62	瑞歯ぐみて	語釈		6行
㉑	〃 70	清水の観音	語釈		11行
㉒	〃 71	ふくいといとくろく	享受史上の逸話		34行

23	夕顔 72	家鳩	(語意〔引用本文ノ〕)	2行
24	若紫 23	鹿の佇みありき	引歌	2行
25	〃	松のとぼそ	引歌	4行
26	〃	命だに	引歌	2行
27	〃	よのまのかげ	引歌	3行
28	〃	ゆくての御事	語釈	2行
29	〃	ふりはへ	語釈	2行
30	〃	くらぶの山	引歌	2行
31	〃	むさしのといへば	引歌	4行
32	末摘花 16	ひなびたる	語釈	2行
33	〃	松の雪のみあたたかげに	典拠	9行
34	〃	梅の花の色のごと	引歌	2行
35	〃	三笠山の少女をば捨てて	典拠	7行
36	〃	夢かと思ふ	引歌	3行
37	〃	古代のおは君	語釈	2行
38	〃	44 平中がそらなき	典拠	6行

○で囲んだ数字が、九大本における注釈の項目の通し番号。巻名の次の数字は、『紫明抄』諸本の各巻毎の通し番号である。ただし諸本によって巻毎の項目数に若干の相違がある場合は、京大文学部本を基準にしている。従って、九大本の第一項目は、『紫明抄』諸本で言えば、桐壺巻の第五〇項目に当たるといふことである。

項目番号の下は、九大本の内容を簡潔な見出しの形で示し、注釈内容によっていくつかの型に分類した。九大本は、全三八項目中二項目が源氏物語よりの引用本文のみで注釈部分がなく、また逆に二項目は源語原典の本文がなく注釈部分のみであり、これらはその旨

略記した。特に、前者においては注釈内容がどのような型に属するものであるかは不明であるが、他の『紫明抄』諸本を参看することによって推測して()の形で示した。猶、最下欄に九大本の行数を挙げ、当該項目の量的把握ができるようにした。

京大本に代表される『紫明抄』の一般的な形では、末摘花巻までの通算項目数は四九四であるから、九大本の三八という数字は、単純に項目数で言えば約七・七%ということになるが、九大本は『紫明抄』の注釈のなかでも比較的長文のもの——換言すれば、比較的重要とおもわれるもの——を抜き出しており、分量的には約一割程度とみてよからう。

四

さて、九大本の抄出態度には、以下に挙げるような特徴を指摘することができる。

まず第一点として、比較的長文の注釈が抜き出されているということである。第一項目の「太液芙蓉未央柳」の五七行、三丁強(丁数で九大本全体の約五分の一)にも及ぶ記事を筆頭に、享受史上の逸話や出典・典拠にかかわるものを中心として、十行以上に亘る長文の記述が、項目数でも全三八項目中九項目と全体の約四分の一を占めている。これは、『紫明抄』の原本より抄出する以上、重要性の高いものを中心とするであろうから、当然の帰結でもあろう。

特に、享受史上での逸話とも言うべきものに言及する、第一項目と第二二項目(ふくいとくろく)をあわせると八五行にも及び、この二項目だけで、九大本全体の実に三割近くの分量を占めているの

である。これらの項目は、源光行・親行ら河内方の源氏学が、藤原俊成から受け継いだ正統なものであることを言挙げしている部分を含んでいるのであるから、ある意味では『紫明抄』中の最重要項目であるといってもよからう。

猶、これに関連して、第一項目について、いささか述べておきたい。九大本の冒頭たる「太液芙蓉未央柳」の項目は、実は源語原典よりの引用本文がない。『紫明抄』の諸本では、「ゑにかけるやうきひのかたちは」云々の二三百字前後の源氏物語本文が引用され、これに続けて「帰来池苑皆依旧、太液芙蓉未央柳、長恨哥、芙蓉、荷一名也」と注した上で、「おほよそ源氏物語といふ物あまたある中に光源氏物語といふは」以下の記述が続くのである。ところが、九大本は、「ゑにかけるゝ芙蓉、荷一名也」の部分で欠いているのである。上掲の如く、九大本は、第一三、一五、二三項目でも、引用本文・注本文を欠いているから、この場合も誤脱の可能性は捨てきれない。その場合は、巻頭の誤脱ということ、この項目の前に、更に別の項目のあった可能性も出てくるが、恐らく誤脱ではないのではなからうか。次項で述べる如く、初めの巻ほど抄出される項目が少なく、桐壺巻は、この項目のみと考えるほうが自然である。あるいは、あえて、「おほよそ源氏物語といふ物」という部分から書き始めることによって、この項目に一書の序のような役割を担わせているのではないだろうか。

第二点として、巻が進むにつれて、項目が抄出される割合が高くなるということが挙げられる。『紫明抄』諸本の全項目のうち、九大本では何項目が抄出されているかの比率を、巻毎に算出すると次のようになる。

桐壺	一三項目中	一項目	〇、九%
帚木	一七五項目中	九項目	五、一%
空蟬	二三項目中	一項目	四、五%
夕顔	八五項目中	二二項目	一四、一%
若紫	五五項目中	八項目	一四、五%
末摘花	四四項目中	七項目	一五、九%

桐壺巻が僅か一項目、帚木・空蟬巻が5%前後であるのに対して、夕顔巻では約三倍に飛躍的に伸び、若紫・末摘花巻と漸増していることが分かる。しかも、帚木巻の九項目は、後ろの三分の一の部分に集中している(帚木巻の項目数は一七五であるが、このうち第一〇項目までは九大本には全く採られていない)。即ち、桐壺巻から、帚木巻の三分の二の部分までは、僅か一項目だけしか採られていないのである。勿論、これらの部分に重要な注釈が皆無というわけではない。例えば、桐壺巻の「十二にて御元服」「しろきおほわけではない。例えば、桐壺巻の「おさおさ」「をのかし、」の項目などは『紫明抄』としては、重要な部分であろう。その一方で、夕顔巻以降は、抄出率がぐんと高くなっているのであるから、抄出の姿勢に一貫性を欠いていると言わざるをえない。このことは、九大本は最終的にきちんと整えられたものではなく、草稿本的なものではないかということ推測させるものである。

特徴の第三点は、抄出率が全体では七、七%にとどまるにもかかわらず、⑤～⑨(帚木135～139)、⑮～⑳(夕顔40～43)、㉑～㉓(夕顔70～72)、㉗～㉙(若紫35～37)、㉚～㉜(末摘花42～44)というように、『紫明抄』原本で隣接しているものをまとめて抜き出すことが多いということである。三つ以上の項目がまとめて抄出されて

いるのは、九大本の実に半数にも及ぶのである。これらは、抄出するにたる重要な項目が集中していたためであるかという点、必ずしもそうではないようである。例えば、第六項目から九項目まで「しぞきて」「なめげなる」「きよろしき」「おまし所」という、主に漢字を当てるだけの簡略な語釈が続き、この四項目が二行にまとめて記されているのだが、これは、抄出する際の親本たる『紫明抄』の二行分をそのまま持ってきたと思しい。事実、京大本、内甲本など、大部分の『紫明抄』の写本でも、この二行は抄出本である九大本と同じような表記となっているのである。これらの項目は特に重要な語句というほどでもなく、この前後では、「中神」の考察や「こゆるきのいそきありく」「とはりちやうもいかに」の典拠の指摘などが、抄出するに相応しいものではないだろうか。

第二、第三の特色などは、巻末の「所々うつしと、む也」という文言とも相俟って、本書の草稿本的姿勢を示しているのではないかと思われる。

ところで、九大本が草稿本であるということは、九大本が草稿本そのものであるということ、必ずしも指示するものではない。むしろ、奥書に言う応永二五年というのは、この写本の書写年代としてはやや古すぎるように感じられ、その意味では、九大本は転写本である可能性が強いと思われる。その可能性を一層補強するのが第二三、一四項目の例である。

・ よりてこそそれかともみめたそかれにほのくみつる花の夕かほ

一・大和国におとこ女あひすみてとしころになりにつれと、夜
□とまりてひるは見るることなかりければ、女としころのな

かなれといまたそのかたちを見ることなしと恨みければ、男あはれかりて、我かたちを見てはおそるゝ心あるへし、といひければ(中略)

・恋しくはとふらひきませぢわやふる三輪の山もとすきたて
るか

第一三項目は、源氏物語本文よりの引用のみであるが、夕顔巻冒頭近く、夕顔の宿の女に興味を持った光源氏が送った返歌である。『紫明抄』諸本では、「此哥、おりてこそといふ本あり、それこそよけれ」云々という本文異同に関する注記があるが、九大本では、その注釈部分が欠落して、見出しにあたる引用本文のみが残った形である。

第一四項目は、三輪山伝承を典拠として指摘する注記であるが、こちらは逆に、源語本文の引用がなく、注釈本文のみである。従って、九大本は形のうえでは、「よりてこそ」の本文(一三項目)の注釈が「大和国に」以下の三輪山伝承の典拠の指摘(一四項目)のように記されているのである。

一体、物語の注釈書の書承過程において、目移りなどのため、前項目の見出しに次の項目の注釈が直結してしまうことは時折見られることである。ただしその場合は、隣接する項目と直結する例がほとんどであって、数項目を誤って書き落とすということはまずありえない。ところが、上述の例は、三輪山伝承の典拠の指摘は、光源氏が夕顔の許に通い始め、素顔をちらりとも見せないその様子が「むかしありけん物の変化めきて」感じられるという場面の注釈であり、「よりてこそ」の和歌の場面とは時間的にも大きく隔たっている。『紫明抄』の他の諸本でも、この二つの項目は、一一項目、

約三〇行も離れているのである。従って、この二つの項目を誤って一つの項目のように書写してしまったのは、『紫明抄』の完本から抄出する過程によるものではない。既に夕顔巻の二二項目から三二項目までが省略され、第二項目と三二項目が隣接している親本、即ち抄出本としての祖本、もしくはその転写本が存在し、九大本はその本を書本（かきほん）として成立したものであり、今回の誤脱は、転写の過程で生じたとみなすのももつとも自然であると思われる。

五

上述のごとく、九大本は抄出本でかつ末摘花巻までの残存本、しかも原本ではなく転写本なのであるが、その本文系統を仔細に検討すると、極めて興味深いことが分かる。論述の都合上、現存する『紫明抄』の伝本を系別に一覽しておく。^注

一、原型本系統

(1)内閣文庫蔵三冊本（内丙本） 完本、抄出本 三冊

二、内閣文庫本系統

(1)内閣文庫蔵十冊本（内甲本） 若紫く花散里欠 十冊

(2)東大図書館本 同 同

(3)島原松平文庫本 同 同

(4)龍門文庫本 同 五冊

(5)神宮文庫本 同 同

三、京都大学本系統

(1)京大文学部本 完本 十冊

四、古筆資料

(2)京大図書館本 若紫く花散里・玉鬘く竹河欠 三冊

(3)内閣文庫蔵一冊本（内乙本） 紅葉賀以下欠 一冊

(4)慶應義塾図書館本 同 一冊

(5)鶴見大学図書館本 若紫一部存 一冊

(1)伝冷泉為相筆夕顔・若紫断簡 内乙、又は内丙本に近似

(2) 同 若紫断簡 内丙本に近似

(3) 同 末摘花断簡（龍興寺蔵） 内乙本に近似

(4) 同 末摘花断簡（陽明文庫蔵） 内乙本に近似

(5)伝後二条院筆紅葉賀断簡 京大本に近似

(6)伝鳥丸光康筆須磨断簡 内丙本に近似

(7)伝二条為世筆残卷（藤裏葉、若菜上く鈴虫一部存） 京大本に近似

(8)伝世尊寺伊行筆竹河断簡 京大本に近似

(9)伝慈円筆総角断簡 どの系統とも一致せず

ここでは、二の内閣文庫本系統の諸本が共通して若紫く花散里の七巻を欠き、四の古筆断簡などをもつても補い得ないことを確認しておきたい。

九大本の本文系統を判別するために、第一四項目「昔ありけん物の変化めきて」の注釈の一部を見てみよう。校異に取り上げた諸本は、原型本系内丙本、内閣文庫本系内甲本・龍門文庫本・神宮文庫本、京大本系京大文学部本・京大図書館本・慶應義塾図書館本・内閣文庫乙本であり、適宜略称を用いている。

①夜□とまりてひるは見るることなかりければ、女、としころ□

なかなれといたまたそのかたちを見ることなしと恨みければ、男あはれかりて、^⑤・我かたちを見てはおそるゝ心あるへし、といひければ、この女のいふやう、たとひかたちみにくしといふともあひみん事をねかふといひければ、さらはみくしけの中におらん、ねかはくは汝ひとりひらきみよ、といひてかへりぬ、とおもひて

① ナシ―内丙。

このおとこ―京文・京図・慶・内乙・内甲・龍・神。

② としころのなかなれと―内甲・龍・神・内丙・内乙。

ナシ―京文・京図・慶。

③ ナシ―内丙。内甲・龍・神〔或本「汝」との傍記アリ〕

汝―慶・京文。京図〔「汝」は補入〕。

④ この女のいふやう―内甲・龍・神。

女のいふやう―京文・京図・慶。

ナシ―内丙。

⑤ 汝―内甲・龍・神・内丙。

おのれ―京文・京図・慶・内乙。

⑥ ともひて―内甲・龍・神。

さて―京文・京図・慶・内乙。

ナシ―内丙。

六ヶ所の異同箇所において、京大本系の諸本が、いずれも九大本とはっきりと対立する本文を持っていることが分かる(②において、内乙本が九大本と一致するが、内乙本は京大本の中ではやや特異な本文を持つ場合があり、この場合も内閣文庫本系統の本文と接触した可能性がある)。次に、原型本系内丙本は、①のように、唯一

九大本と共通形態を取る場合もあるが、一方で④⑥の例のように独自の形態を取って九大本に対立するなど、やや特殊な本文である。これらに対して、内閣文庫本系の諸本(内甲本・龍本・神本)は、六例中五例まで、九大本と完全に一致する本文を持ち、その親近關係は極めて明白である。

九大本の本文が、京大本系統のそれとは対立し、内閣文庫本系統の本文である見通しが立ったので、今度は、九大本と京大本の本文の対立が分かりやすい形で挙げてみよう。

次に掲げるのは、第一項目「太液芙蓉未央柳」の中から、九大本と京大本(文学部本を代表として掲出する)との対立が鮮明な部分を抜き出したものである。カッコ内は同じ本文の伝本名である。

九 行成卿特従大納言一筆本 (内丙。内甲・龍・神〔傍書ナシ〕)

京 侍従大納言行成卿一筆本(京図・慶・内乙)

九 専使とは(内甲・龍・神・内丙・内乙・慶)

京 専使と(京図)

九 女三宮女三宮の御方(内甲・龍・神) 女三宮の御方(内乙・内丙)

京 女三宮女三宮の御方(京図・慶)

九 みやこに(内甲・龍・神・内丙)

京 みやこの(京図・慶・内乙)

九 素素本もイ叙か本も(内甲・龍・神。内丙〔傍書ナシ〕)

京 愚本も (京図・慶・内乙)

ここでも、内乙本と内丙本がやや中間的な形態を取るが、内閣文庫本系の諸本は、常に九大本と共通異文を形成し、京大本系とは対立していることが分かる。

他にも、②帚木110の、「神おほす」(九・内甲・龍・神) ↑ ↓「おほす」(京文・京図・慶・内乙・内丙)、「ほむら」(九・内甲・龍・神・内丙) ↑ ↓「ほのほ」(京文・京図・慶・内乙) や、⑦夕顔42の「問云、某院何所哉、答云、若河原院敷」(九・内甲・龍・神・内丙) ↑ ↓「問、某院何所哉、答、某院若河原院敷」(京文・京図・慶・内乙) の例などがあり、九大本は、内閣文庫本系の本文を有していると断定してよい。

上述した如く、内閣文庫本系の『紫明抄』は、諸伝本共通して、若紫巻く花散里巻の部分に欠いている。従って、九大本が、内閣文庫本系の伝本であるならば、若紫巻の八項目と末摘花巻の七項目の計十三項目は、これまで全く知られていなかった内閣文庫本の本文を伝えるものであり、従来京大本系の本文しか見ることのできなかったこの部分において、貴重な対校資料となり得るものである。

例えば、若紫巻「しかのた、ずみありく」の項目で、現存『紫明抄』は全て、引歌として万葉集の「春なればすかるなるの、郭公ほとく／＼いもにあはすきにけり」を挙げる。更に、内乙本のみ、その後に細字で「すかるは若鹿を云也」と記し、内乙本の独自異文かと考えられてきたが、この部分は九大本にも存し、内乙本の本文は、恐らくは内閣文庫本系の本文との接触によるものではないかと推測することができる。

又、末摘花巻「ゆめかとおもふ」の項目では、「わすれては夢かとおもふ思ひきや雪ふみわけて君をみんとは」「変態續紛神又神、新声宛転夢非夢」の和歌と漢詩を挙げるが、内乙本のみ、前者には「古今、業平」後者には「長恨歌」の出典注記があったが、これも又、九大本と共通するものである。出典注記が、転写の過程で脱落することはしばしばあるが、二ヶ所揃って追補されるということは偶然の一致とは考えられないから、これも九大本と内乙本との間に系統上の関連を見出さすべきであろう。

これらの項目の中で、京大本系との間で最も長文の異同が存するのは、末摘花巻々々末近くの平中説話を引用している部分である(九大本第三八項目)。この部分、九大本・京大本系共に、「御すりのかめの水にみちのくにかみぬらしてのこひ給へは、へいちうかやうにいろとりくはへ給な」云々の源氏物語本文を引用するが、京大本系の『紫明抄』では、「我にこそつらさは君か見すれとも人にすみつくかほのけしきよ(「平仲妻哥」と詠者名を細字で記す)」の和歌を掲げるのみである。しかし、この部分は、引歌の注記ではないのであるから、京大本のような本文では不十分と言わざるを得ない。ところが、九大本では、右の平中の妻の和歌に続けて、言わば左注のような形で、詠歌状況の説明を行なっている。

へいちうみるめことになくけしきをみせんとて、すゝり□かめに水をいれてめをぬらしけるを、女心えてそのかめにすみを入たりけるをしらて、れいのやうにしてかへりたりけるをみて、
とあり

平中説話としては、最も人口に膾炙したものであるが、この記述を抜きにして、京大本系のように平中の妻の和歌を挙げるだけでは、

この部分の注釈としてはやや舌足らずであろう。しかも、この説話の本文は、早くに世尊寺伊行の『源氏釈』が掲出し、『異本紫明抄』などにも継承されているから、素寂が気付かなかったはずはない。恐らくは、九大本のような形が『紫明抄』の本来的なもので、京大本系の本文は誤脱か何によって、和歌のみが残ったという事情でもあるのではないだろうか。

このように、内閣文庫本系の若紫・末摘花巻の本文を伝存させている九大本は、様々な問題を提起するものである。

六

本節では、九大本をめぐって、残された一、二の問題について見てみよう。

まず、九大本に見える異文校合は、どのような本との校異であるのかについて考えてみたい。

九大本には、一三箇所に亘って、異文の表記が細字でなされている。それらの多くは次の例のように、九大本が独自の本文で、文意からいっても、傍書されている異文の本文を採用したほうが妥当なものである。

したかひつかえたる親行ひとり（①桐壺50）

うれしかりしと（①空蟬10）

傍書を除いた九大本のような本文は、他の『紫明抄』諸本には見られず、内容から言っても、前者は「したかひつかえたるものたゝ親行ひとり」、後者は「うれしかりしか」の形が自然である。

これら以外に、対校本文をある程度推測できる例が若干あるが、

それらの全てに当てはまる対校資料を決定するまでには至らない。代表的なものとして、以下の三つの型を挙げることができる。

1、異文が京大本の本文である場合。

⑩夕顔43の「けいめいして」の項目で、『紫明抄』諸本は、用例として『遊仙窟』を挙げるが、九大本は、この書名に朱で合点を付して「イ」と記す。「イ」の位置から考えて、この合点は『遊仙窟』という書名に付されたのではなく、合点そのものに付けられていると考えるべきである。九大本では、項目の文頭や、出典などの固有名詞に合点を付すことは極めて自然に見られるが、異文表記と組み合わせられているのは他になく、特異な例である。そこで他本と比較してみると、京大本系の諸本（ただし内乙本を除く）が『遊仙窟』に合点を付しているのに対して、内閣文庫本系の諸本は合点を持たない。即ち、この合点の異文表記は、京大本系との校異を示したものであることが分かる。同様の例は、前節で引用した①桐壺50の「行成卿」（特從大僧イ）「素寂か本」（異本イ）などがある。九大本が内閣文庫本系の本文である以上、校異として掲げられるのが京大本系の本文であるのは、ある意味では当然であるといえよう。

2、異文が京大本の本文ではない場合。

①桐壺50の「太液芙蓉未央柳」の項目中に、左記のようなものがある。

暮年（イムカシ）に

この部分内閣文庫本系・京大本系の大部分の伝本が「暮年」の本文であり、「曾年」の本文は、わずかに原型本系の内丙本と、京大本系ながら内閣文庫本系との中間的本文といわれる内乙本とにのみ見

られるものである。従つてこの部分の校異は、内内本もしくは内乙本の系統の伝本を対象として分けることが分かる。このような特異な本文も異文として掲げていることは注目されよう。

3、異文が現存する『紫明抄』の全伝本と一致する場合。

③若紫43の「くらぶの山」の項目では、引歌として次の和歌が掲げられる。

すみそめのくらまの山にいる人はたとくもかへりきなかへるゝなり拾遺ん
この部分、『紫明抄』の他の伝本では、全て「かへるへらなり」の形であつて、しかも内内本を除く諸本は「拾遺」という集付も持つており、この校異は、『紫明抄』の他本との異同を示したものと考へられる。

引歌として掲げられるこの和歌は、『後撰集』一一、恋四、八三二の平中興女のもので（他に『大和物語』一〇五段、『古今和歌六帖』八八四にもほぼ同形で見える）、『後撰集』では、第五句は九大本同様「かへりきなゝん」である。この引歌を最初に指摘したのは、伊行の『源氏釈』であるが、『源氏釈』の二次本たる前田家本では第五句「かへりきなゝん」と『後撰集』と同じ形をとるものの、一次本の書陵部本では「かへるべらなり」とあつて、『源氏釈』の段階から揺れがあることが分かる。現在の一次本と二次本が『源氏釈』の生成過程をそのまま反映させているとすれば、伊行は最初に「かへるべらなり」の形で引用したあと、『後撰集』の本来の形に訂正したということになる。しかし、後代の注釈書に継承されたのはむしろ「かへるべらなり」の本文であり、『奥入』『紫明抄』『河海抄』『孟津抄』『岷江入楚』など、主要な注釈書は全てこの形である。更に、この「かへるべらなり」の和歌の出典を『拾遺集』とするのは、

『紫明抄』が初出であるようで、この集付も含めて『河海抄』以下に引き継がれている。ただし、『拾遺集』（『拾遺抄』も含めて）には該当歌はなく、謬説が注釈史の流れのなかに定着したものである。このような趨勢の中で、九大本が「かへりきなゝん」という、引歌として正確な本文を掲げていることは注目されよう。しかも、「かへるべらなりイ拾遺」として校異を掲げていることから、このような注釈書の上での流布している本文の存在を知った上で、あえて『後撰集』の本来の形をとっているのであるから、そこには確固たる意志のようなものを読み取ることができる。

猶、中世の注釈書の中では、『異本紫明抄』が「かへりきなゝん」の本文を持つており、あるいは九大本などと何らかの関連があるのかもしれない。『異本紫明抄』は、前節で取り上げた、末摘花巻の平中説話の注釈でも、九大本に近い本文を持つており、両者の関係は、更に追求する必要があるかもしれない。

次に、現存の九大本が末摘花巻までで終わっていることについて考えてみよう。

まず、九大本は本来どの巻まで存していたのかという問題である。即ち、九大本は当初より末摘花巻までしかなかったのか、あるいは他の『紫明抄』同様、夢浮橋まで完備していたものが、何らかの理由で紅葉賀巻以降が伝来の過程で失われてしまったのか、ということである。これについては、前者の可能性が極めて強いであろう。それは、上述した如く、九大本は草稿本的色彩が極めて濃く、全体を見通しての著述とは考えにくいこと、更に、帖末に「すあつむ花までの内所々うつしとゝむ也」という識語が記されていることによ

る。

では、九大本は、何故末摘花巻までの抄出本なのであろうか。

これに対する答えとしては、九大本——厳密に言えば九大本のよ
うな抄出形態となった本の祖本——が抄出するに際して依拠した
『紫明抄』の巻冊の切れ目が末摘花巻であったとするのが、最も自
然であらう。

ところで、『紫明抄』の巻の分け方は、巻一にどの巻までを含め
るかによって、諸本間に小異がある。京大本系の中でも、京大所蔵
の二本は巻一が夕顔巻まで、慶應本・内乙本が末摘花巻までとなっ
ている。この巻冊の分け方が各本の残存状況と連動しており、京大
図書館本は巻一の桐壺く夕顔巻が残存し、慶應本・内乙本は、共に
巻一のみが残存本であるが、こちらは末摘花巻まで残っている。

一方、内閣文庫本系では全伝本が、巻一が桐壺く末摘花巻、巻二
が紅葉賀く花散里巻であり、京大本系の慶應本などと同じ形をとっ
ている。ところが、内閣文庫本系の諸本は全て若紫く花散里巻を欠
いており、これは巻一の後半(量的には約四分の一強)と巻二に該
当するのである。巻冊の分け目と残欠状況が一致しないのは奇妙な
ことで、諸本共通して巻一の後ろの部分が脱落するというのは不自
然であるといえよう。

恐らく、内閣文庫系の祖本は、今日の内閣文庫本系の諸本の形と
は異なっており、京大本系のように夕顔巻までを巻一としていたか、よ
しんば巻の切れ目は末摘花巻であるとしても、分量の関係で冊子の
分け目は夕顔とする伝本ではないかと思われる。このような形の本
で第二分冊にあたる若紫く花散里の部分が欠脱したものから、今日
の内閣文庫本は派生したと考えるべきであらう。とすれば、内閣文

庫本には、実際に末摘花巻で巻冊の切れ目のある本は確認すること
ができないのである。このような状況下において、九大本は、内閣
文庫本系の中で、唯一桐壺から末摘花巻までが一まとまりである伝
本の姿を伝えているわけで、この意味でも貴重な資料といえよう。

七

以上見てきたように、九大本『紫明抄抜書』は、全一六丁、三八
項目に留まる小冊子ではあるが、今日では失われてしまっている内
閣文庫本系の若紫・末摘花巻の本文を一部伝えるものであり、貴重
な資料であるといえよう。書写年代も比較的古く、また異文校合や
巻冊の分け方などを通して、現存の九大本の背景をも含めて、様々
な問題提起をしてくれるものである。更に、大島本源氏物語夢浮橋
巻の書写者である聖護院道澄の所持本でもあり、源氏物語享受史上
でも興味深い文献である。

注

(注1)『紫明抄』諸本のうち、書写年代が南北朝期頃までのものに、慶應
義塾図書館本・鶴見大学図書館本・京都大学文学部本があり、更に京都
大学図書館本が応永十七年の書写である。九大本はこれらに続き、内閣
文庫蔵一冊本(内乙本)や東大図書館本とはほぼ同時代であり、内閣文庫
蔵三冊本(内丙本)・内閣文庫蔵十冊本(内甲本)・神宮文庫本・龍門
文庫本・島原松平文庫本よりは、書写年代が古い。又、古筆資料の類は、
当然のことながら九大本よりは古い。

(注2)九州大学開学記念貴重文物展観(源氏物語の本)(平成六年)に展
示され、その折りの解説目録では簡潔ながら的確に解題がなされている。

(注3) 聖護院道澄とその叔父道増が、吉見正頼の依頼で、飛鳥井雅康筆源氏物語五四帖のうち、夢浮橋巻と桐壺巻を書き改めた経緯については、池田龜鑑『源氏物語大成』研究・資料編(昭和三〇)、初出は『文学』昭和九・十)、拙稿「大島本源氏物語をめぐって——その伝来過程を中心に——」(『香椎瀆』33、昭和六三・一二)、柳井滋「大島本源氏物語の書承と伝来」新日本古典文学大系『源氏物語』一、(平成五)等に詳しい。

(注4) 同書は、天理図書館開館六周年記念展図録『王朝物語の世界——源氏物語とその周辺』(平成三・十)に写真版が収録されている。

(注5) 内容は『紫塵残幽』である(伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』昭和五五)。猶『源氏物語に関する展覧書目録』(昭和七)一三頁の「源氏注、道澄所持本、自筆歟一冊」とあるのは、本書のことか。

(注6) 同書には、他に「円融蔵」「盛胤之印」(梶井宮盛胤法親王)の印が捺されている。(第10回中央図書館貴重文物展観目録「伊勢物語とその注釈書」九州大学『大学広報』四三四、一〇頁、昭和五七年一月)

(注7) 例えば、帚木巻の項目数は、原型本系内丙本では二三三、京大本系京大文学部本では一七五、内閣文庫本系内甲本では一七七である。抄出本である内丙本の項目数が少ないのは当然であるが、京大本系と内閣文庫本系も巻によっては項目数に小異がある。

(注8) 『紫明抄』の例で言えば、内閣文庫蔵三冊本(内丙本)などには、そのような例を多く数えることができる。

(注9) 原型本系統を立てることについては、拙稿「水原抄」から『紫明抄』へ(『源氏物語古注釈の世界』平成六・三)「内閣文庫蔵三冊本(内丙本)」「紫明抄」について(『香椎瀆』39、平成六・二)参照。
猶、他にも古書展の目録などに若干の記述があるが、いずれも本表と重複するようである。まず、龍門文庫善本叢刊、一〇『紫明抄』の解説(川瀬一馬執筆)に言う、村口書房に存していた「鎌倉末期の書写と認められる巻一」の古写本」は、現在の慶應義塾図書館本であり(このこと、慶應義塾図書館の白石克氏の教示を得た。また、平澤五郎氏も「慶應義

塾図書館蔵「鎌倉末南北朝」写「紫明抄存巻一」零本一解題篇(一)』「斯道文庫論集」三〇、平成七年三月)の中で、村口氏の手によって綴葉装から大和綴りに改装されたことを述べる)、更に、東京古典会の古典籍大下見展観大入札会目録には、昭和五二年、五五年に同じ写本が出陳されているが、これも慶應本と同一の本と思われる。

(注10) この項目に関しては、拙稿「紫明抄」の古筆資料について(『香椎瀆』41、平成八・三)参照。

(注11) 『源氏積』の生成過程や現存本文については、伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』(昭和五五)、拙著『源氏積諸本集成』(昭和六二)等参照。

(注12) 諸注釈書が、「すみぞめの」の和歌を引歌として適切と認定しているというのではない。例えば、『奥入』(一次本大島本)では「想は此哥之心更不叶」とも述べる。あくまでも、引用本文としての議論である。(注13) 正確には、桐壺夕顔巻(巻一)、須磨少女巻(巻三) 橋姫夢浮橋巻(巻十)の三巻が残っている。五節参照。

(注14) 例えば、京都大学文学部本で言えば、巻頭より夕顔巻までが約五五丁、若紫・末摘花巻が約一六丁、紅葉賀く花散里巻が約二七丁であり、夕顔巻で巻冊を分けても前半部分の方が多く、これを仮に末摘花巻で分けるとすれば、前半部分は後半の倍以上の丁数になり、きわめてバラバラが悪い。

(付記) 本稿は、平成七年度九州大学国語国文学会での発表に基づくものである。席上、御教示戴いた各位に御礼申し上げます。

又、『紫明抄』の閲覧に御高配を賜った関係各位に深謝申し上げます。
(追記) 校正の段階で岩坪健「伝宗長作『紫塵残幽』について」(『古代中世文学研究論集』一、平成八)に接した。(注5) 書に、菅政友旧蔵本などの伝本を加え、作者や成立について総合的に分析したものである。